

# 「幕末百景 ～それぞれの立場の幕末史」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成22年11月）から大幅に改変して、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

## 1. 幕末史の主演となった薩摩藩

「幕末」。この言葉を聞いて、皆様は何を思い浮かべられるでしょうか。

西郷隆盛(さいごうたかもり)や大久保利通(おおくぼとしみち)、吉田松陰(よしだしょういん)や桂小五郎(かつらごろう、後の木戸孝允=きどたかよし)に高杉晋作(たかすぎしんさく)、あるいは坂本龍馬(さかもとりょうま)や中岡慎太郎(なかおかしんたろう)、さらには幕府側の勝海舟(かつかいしゅう)など、いわゆる幕末の志士たちが織りなす様々な人間模様に対して、私たちはその虜(とりこ)になることが多いようです。

幕末を舞台とする物語は、小説や映画、舞台やTVドラマなどで数えきれないほど広まっており、NHK大河ドラマでも何度も演じられていますが、私たちは「幕末の真実」について、どれだけの知識を持ち得ているのでしょうか。

幕末の定義としては、1853年にアメリカのペリーが黒船に乗って浦賀に来航し、翌年には強引に日米和親条約を結ばせて、それまでの鎖国から我が国を無理やり開国させた頃からだというのがありますが、その歴史的事実は正しいとしても、当時の世の中の様々な動きには、それに至るまでの大きな歴史の流れが存在することは、意外と知られていないようです。

今回の歴史講座では、討幕や明治維新の立役者となった、いわゆる薩長土肥(さつちょうとひ)の4つの藩に江戸幕府を加えた、それぞれの幕末期における歴史を検証し、横並びに分かりやすくまとめることで、幕末の大きな歴史の流れをつかんでみたいと思います。

島津家(しまづけ)を当主とする薩摩藩(さつまはん)は、守護大名から戦国大名へと成長し、江戸幕府が誕生した後も所領を安堵(あんど)され、有力な外様大名として君臨し続けましたが、その流れは決して平坦ではありませんでした。

島津家は、戦国時代にはあわや九州全土を統一するかの勢いだったのですが、豊臣秀吉(とよとみひでよし)によってその野望は打ち砕かれ、現在の鹿児島県に相当する薩摩・大隅(おおすみ)の2カ国を中心とする領地に閉じ込められました。

秀吉の死後、関ヶ原の戦いでは西軍に属して、敗戦後は中央突破を強行し、わずかな手勢となりながらも無事に帰国して、その後も徹底抗戦の意思を示したことによって、島津家の武力を恐れた徳川家康(とくがわいえやす)から所領を安堵されたのですが、実は島津家は、始めは家康に味方しようとしていました。

関ヶ原の戦いの前哨戦(ぜんしょうせん)として伏見城の戦いが有名ですが、島津家はこの際に伏見城に入り、城主の鳥居元忠(とりいもとただ)を助けるつもりでした。しかし、事前の根回しが不足していたため、裏切りを恐れた鳥居元忠から拒否されてしまったのです。

つまり、島津家は事前の情報収集をしっかりと行っていなかったがゆえに状況判断を誤り、関ヶ原の戦いには当初の思惑とは裏腹に、なおかつ少人数で西軍に属さざるを得なかったという、いわば貧乏クジを引いた格好となってしまいました。

この後の島津家は、所領を安堵してくれた幕府に対して表向きは恭順(きょうじゆん、命令につつしんで従う態度をとること)の姿勢を示すものの、関ヶ原での恨みを忘れることはなく、幕末になると、時には幕府と協力して討幕派を抑えながら、最終的には自らが討幕を果たして、明治維新の元勳として君臨するようになります。

要するに、幕末における薩摩藩は、関ヶ原での反省という前提に立ったうえで情報収集や情勢判断をしっかりと行い、常に主役側に回ることで、最終的には歴史の勝者となったのでした。薩摩藩の歴史は、いわゆる「失敗から学ぶ」という、歴史学習の原点に根差したものだそうです。

さて、関ヶ原以後の薩摩藩ですが、1851年に薩摩藩主となった島津斉彬(しまづなりあきら)は、我が国の開国を受けて、それ以前に調所広郷(ずしよひろさと)の改革によって回復した藩の財政を惜しみなく富国強兵に活用しました。

西欧諸国に対抗するためには、鉄製の様々な武器などを必要としましたが、当時の我が国の製鉄技術は、西欧のそれと比べて遅れていました。このため、西欧風の製鉄を行うために反射炉の建設が急がれたのですが、斉彬はいち早く本拠地の鹿児島に反射炉を築造しました。

斉彬は、他にも造船所やガラス製造所を次々と建設し、また砲術などの洋式の軍事訓練を行って、軍事力の強化にも努めました。ちなみに、我が国の国旗である「日の丸」は、幕末に諸外国との条約を結んだことで、外国船と区別するための標識として考案されたものでもありますが、その際に日の丸を提案した者のひとりとして斉彬の名が伝えられています。

こうして、薩摩藩における様々な改革を行い、結果として我が国の近代化にも大いに貢献した斉彬でしたが、1858年に急死してしまった後は、藩主の地位を継いだ島津忠義(しまづただよし)の父であり、斉彬の異母弟でもあった島津久光(しまづひさみつ)が藩政の実権を握ったことで、薩摩藩は再び保守的な行動をとるようになりました。

斉彬は、生前に身分に関係なく有能な人材を登用しましたが、その中のひとりに西郷隆盛がいました

た。西郷は斉彬の急死に絶望して自殺を図ったり、斉彬の死後に藩政の実権を握った久光と何度も衝突して島流しにあたりするなど、不遇の時代が続きました。

一方、西郷の親友であった大久保利通は、久光に取り入り、側近として重用されましたが、決して久光の保守的な考えに賛同したわけではありませんでした。いずれ時代が西郷を必要とするようになると先を読み、あえて猫をかぶっていたのです。

やがて利通の読みは当たり、1862年に起きた、久光の行列をイギリス人が馬で横切ったことから殺傷されたという生麦事件の悲劇の後、翌1863年に薩摩藩がイギリスと衝突して薩英戦争が起きると、このような非常事態に対応できる人物は彼しかいないということで、西郷は再び歴史の表舞台に登場するようになりました。

この後の薩摩藩は、それまでの幕府に対する中立的な立場から、西郷らによって次第に武力討幕へと政策が転換され、1866年には土佐藩(とさはん)の坂本龍馬や中岡慎太郎の仲介によって、長州藩の桂小五郎(後の木戸孝允)らといわゆる薩長同盟(別名を薩長連合)を結び、討幕への機運が一気に高まりました。

1867(慶応3)年旧暦10月14日、薩摩藩はついに朝廷から討幕の密勅(みっちよく、秘密に作成された天皇からの命令書のこと)を手に入れましたが、同じ日に將軍の徳川慶喜(とくがわよしのぶ)が大政奉還を行って政権を朝廷に返上したために、討幕の計画は頓挫(とんざ)してしまいました。

この後は討幕派と佐幕派(=幕府を支持する立場のこと)とのせめぎ合いが続き、同年旧暦12月9日の王政復古の号令から小御所(こごしよ)会議を経て、慶喜の内大臣としての地位と徳川家の領地の返上を討幕派が認めさせました。

慶喜は会議後に京都から大坂城に引きあげましたが、当初は新政府との表立っての衝突を避けようとしていました。しかし、会議の決定を不服とした旧幕府兵が、江戸の薩摩藩の屋敷を焼き討ちにするという事件が発生すると、慶喜も最終的に新政府軍と武力で戦うことを決断しました。

これら一連の流れが、翌1868年(慶応4年=明治元年)旧暦1月の鳥羽・伏見の戦いから始まる戊辰(ぼしん)戦争の引き金となったのです。この戦いの結果、幕府はその実権を完全に失い、薩摩藩などを中心とする明治新政府が誕生することになったのでした。

ちなみに、戊辰戦争においては朝廷から下されたいわゆる「錦の御旗(みはた)」や、最新鋭の阿姆斯特朗砲が大いに役立ったのですが、これらのキーワードは、いずれ重要な場面で再登場することになります。

## 2. 復讐の炎を燃やし続けた長州藩

毛利元就(もうりもととなり)がルーツである長州藩(ちょうしゅうはん)は、元々は安芸(=現在の広島県西部)を中心に120万石を領する大大名でした。ところが、関ヶ原の戦いを経て一気に約5分の2の37万石に

まで減らされてしまうのですが、これは、当時の領主の優柔不断(=気が弱く決断力にとぼしいこと)にその主因がありました。

大胆な謀略や本人の戦上手(いくさじょうず)もあって、元就の一代で広大な領地を手に入れた毛利家でしたが、後を継いだ孫の毛利輝元(もうりてるもと)は、凡庸(ぼんよう、すぐれた点もなく平凡なこと)な器量しか持っていないませんでした。

輝元は、関ヶ原の戦いの際に西軍の総大将に祭り上げられ、大坂城(現在の大阪城)に入城しましたが、毛利家の一族の吉川広家(きつかわひろいえ)が家康の東軍に通じており、家康から事前に毛利家の本領安堵を約束されていた広家は、輝元が大坂城から出陣させないように工作するとともに、自軍は関ヶ原で一切動きませんでした。

戦いの後に家康から大坂城の明け渡しを要求された輝元は、家臣の「大坂城に残って戦うべきだ」との声を無視し、本領安堵の約束を信じ切って大坂城を無傷で明け渡したのですが、その途端に家康は毛利家の領地没収を宣言したのです。この時になって輝元ばかりでなく広家も含めて、自分たちが家康にだまされていたことに初めて気がついたのですが、すでに後の祭りでした。

広家による必死の懇願によって、毛利家は辛うじて断絶を免れましたが、その領地は周防(すおう、現在の山口県東部)と長門(ながと、現在の山口県西部)の2カ国のみで激減してしまいました。

もし輝元が家臣の進言どおりに大坂城で戦っていたら、薩摩の島津家と同じように「毛利家恐るべし」と感じた家康によって、本領が安堵された可能性もあったのですが、凡庸な輝元はそこまで頭が回らなかったのです。

この後も、毛利家は新たな城を交通の便の良くない山陰側の萩(はぎ)に築くことを強要されたり、幕府で普請(ふしん、土木工事のこと)が行われる際には、自費で手伝わされたりするなど散々な目にあいましたが、毛利家の家臣たちは、自分たちの悲劇の原因を、主君である輝元のせいにするのもできず、非情な処分を行った幕府を深く恨むようになり、太平の世の中が続く間も、長州藩は復讐の機会をじっと伺い続けていました。

そんな長州藩も、やがて薩摩藩と同様に財政事情が悪化する一方となりましたが、家臣の村田清風(むらたせいふう)による財政改革に成功したことで、雄藩として幕末に名乗りを挙げました。そして長州藩では、今後の藩の、いや我が国の運命を握る素晴らしい人材が数多く登場するようになるのです。

若い頃から学問に励んでいた長州藩の吉田松陰は、ペリーによる黒船の来航を受けて、外国や外国人を我が国から排除しようとする攘夷論(じょういろん)に基づく危機感を覚えるとともに、自身が黒船に同乗して、外国へ留学したいと強く思うようになりました。

松陰の試みは結果として失敗に終わり、自首した後に郷里の萩に送られた松陰は、やがて松下村塾(しょうかそんじゅく)を開いて、地元の武士や町人など、身分にかかわらず多くの塾生に対して教えまし

た。

しかし、幕府の大老であった井伊直弼(いいなおすけ)による安政の大獄が始まると、松陰も幕府によって捕えられ、1859年に30歳で処刑されてしまいました。なお、以下の彼の辞世はあまりにも有名ですね。

「身はたとひ 武蔵の野辺に朽(く)ちぬとも 留(とど)め置かまし 大和魂(やまとだましい)」

松陰の身体は文字どおり刑場の露と消えましたが、その精神は塾生たちによって受け継がれ、長州藩における討幕の機運を高めることになったのでした。

さて、幕末の頃までの学問として最も有名なものの一つに、水戸学がありますが、これは、江戸幕府が主君に忠誠を誓うという内容がふさわしいということで、公式の学問として採用した朱子学からの大きな流れが基本となっています。

ところが、幕末の頃の水戸学は、主君としてふさわしいのは、幕府よりもむしろ天皇を中心とする皇室であり、また諸外国からのいわゆる外圧に対しては、これを排除すべきであるとする尊王攘夷の考えが中心となっていました。

吉田松陰も水戸学を学んで大きな影響を受け、その松陰から学んだ塾生たちによって、長州藩の藩論もいつしか尊王攘夷論が中心となり、討幕へ向けての大きな推進力になりました。攘夷の機運が高まった長州藩では、幕府の攘夷決行の掛け声に応じて、1863年旧暦5月10日に下関海峡を通過する外国船に対して砲撃を実際に行いました。これを長州藩外国船砲撃事件といいます。

しかし、あまりに急進的な攘夷論は薩摩藩や会津藩などから敬遠され、同年旧暦8月18日にはクーデターが起きて、三条実美(さんじょうさねとみ)らの公卿(くぎょう)や長州藩などの急進派が京都を追われてしまいました。これを八月十八日の政変といいます。

巻き返しを図りたい長州藩士らは、密かに京都に入って挽回を試みますが、翌1864年に集結していた旅館の池田屋で幕府の新選組に襲われ、多数が殺傷されました。これを池田屋事件といいます。

追いつめられた長州藩は、京都で薩摩・会津の両藩と激しく戦いましたが敗れました。これを禁門の変、または蛤御門(はまぐりごもん)の変といい、その後の幕府による第一次長州征伐によって、長州藩の藩論は保守的な思想が中心となりました。

そんな長州藩に追い打ちをかけるかのように、長州藩外国船砲撃事件への報復として、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの4カ国が下関を砲撃して占領するという事件が起きました。これを四国艦隊下関砲撃事件といいます。

まさにボロボロの状態となった長州藩ですが、砲撃事件によって武力による攘夷の不可能を悟った長州藩は、外国から学びながら力を蓄える道を選択し、後に高杉晋作によって奇兵隊が結成される

と、藩論を再び討幕へと導くことに成功しました。

ちなみに、外国からの攻撃を受けて攘夷の方針を転換したところは、薩英戦争を経験した薩摩藩と同じ路線をたどっています。いつの世も、人間は実際に経験しないと本質が理解できないのが宿命なのかもしれませんね。

ところで、この当時に我が国と積極的に干渉してくる国が二つありました。それはイギリスとフランスです。前者は討幕派に、後者は幕府にそれぞれ接近して軍事的・財政的な支援を続けました。

しかし、我が国の両派は外国からの支援は喜んで受けたものの、身に余る過剰な肩入れは断りました。幕府を、あるいは討幕派を倒す際に外国の力を頼り過ぎると、事後に外国からの法外な干渉を受ける可能性があることが分かっていたからです。こうした諸外国との絶妙なバランス感覚が、幕府が倒れた後も我が国が西欧諸国の植民地になることなく、明治維新を迎えることができた大きな要因となりました。

さて、討幕派が再び息を吹き返した長州藩は、土佐藩の坂本龍馬や中岡慎太郎らの仲介によって、禁門の変（＝蛤御門の変）で敵同士となった薩摩藩と 1866 年に同盟を結ぶことになりました。いわゆる薩長同盟（＝薩長連合）です。

長州藩の動きを警戒した幕府は、同年に再び長州征伐の兵を起こしましたが（これを第二次長州征伐といいます）、薩長同盟の影響でその動きは鈍く、やがて当時の将軍である徳川家茂（とくがわいえもち）が急死すると、征伐そのものが中止となりました。

自己に逆らう長州藩を征伐できなかったことで幕府の威信はさらに低下し、翌年（1867年）の大政奉還への流れとつながるのですが、その大きなきっかけとなったのが先述した薩長同盟であり、これを実現させたのは土佐藩の坂本龍馬と中岡慎太郎らが中心でした。

ではなぜ土佐藩が幕末の歴史の表舞台に登場することになったのでしょうか。実は、この流れも関ヶ原の戦いが由来となっているのです。

### 3. 土佐藩と肥前藩の幕末史

江戸幕府における土佐藩の藩主は山内家（やまうちけ）であり、その藩祖は戦国武将の山内一豊（やまうちかずとよ）です。山内一豊といえば、妻である千代（ちよ）の内助の功が有名であり、平成 18（2006）年の大河ドラマにもなりましたが、一豊自身の「出世物語」について皆さんはご存知でしょうか。

実は、一豊はいわゆる「口八丁（くちはちょう、口が達者なこと）」で土佐藩の藩主の地位を手に入れたのです。関ヶ原の戦いの以前、徳川家康は小山（おやま、現在の栃木県）において有力武将と今後の作戦会議を練っていました。この席で福島正則（ふくしままさのり）が家康に味方すると述べたのですが、それに勝るとも劣らない重要な発言を一豊が行いました。

一豊は、当時の居城であった掛川城を無傷で家康に明け渡すと宣言したのです。予想外の申し出に家康は驚きましたが、一豊に負けじと他の武将が我も我もと明け渡しを約束して家康に忠誠を誓ったことで、一豊が発したひと言が、家康の立場をより一層有利にしたのです。

家康は小山における一豊の功績を重視して、関ヶ原の戦いで大した手柄がなかったにもかかわらず、一豊に土佐一国の支配を認めました。山内家は徳川家から大きな恩を受けたことで、以後も幕府の立場を考えて行動し、幕末においても大政奉還へと向かった、いわば可能な限り幕府を守る流れへと山内容堂(やまうちようどう)が政策を展開していったのでした。

また、山内一豊が土佐の支配を認められたことに関しては、別の副産物をもたらしました。山内家以前に土佐を支配していた長宗我部家(ちょうそかべけ)の家臣との対立です。

土佐藩では、以前から山内家に従っていた家臣を上士(じょうし)として待遇した一方で、かつての長宗我部の家臣は郷士(ごうし)とされ厳しい差別を受けました。こうした差別が郷士たちのエネルギーと化したことで、幕末における尊王攘夷運動の一因となり、また明治の自由民権運動のきっかけにもなりました。

例えば坂本龍馬は郷士の出身ですし、自由民権運動で有名な板垣退助(いたがきたいすけ)も元々は土佐藩の藩士です(ただし、板垣自身は上士の身分でした)。また、龍馬自身は商家の血を引いていたこともあり、敵同士だった長州藩と薩摩藩とを、討幕のために最新鋭の武器が欲しい長州藩と、密貿易が得意な薩摩藩という経済的な立場から結びつけることで、薩長同盟にこぎつけることに成功しました。

この他にも、我が国初の会社組織とされる海援隊を立ち上げたり、いわゆる船中八策という、当時では非常に進歩的な基本方針を残したりするなどした龍馬の自由な生き様の根底には、関ヶ原の戦いからの大きな歴史の流れがあったのです。

ところで、明治維新の功績があった藩として、私たちは一般的に「薩長土肥」という言葉を使いますが、このうちいわゆる「薩」「長」「土」についてはよく知られているものの、残った「肥」、すなわち肥前佐賀藩(ひぜんさがはん)に関しては、その業績は意外と知られていないようです。

なぜ肥前藩が他の雄藩と肩を並べるようになったのでしょうか。そのカラクリは、実は「最新鋭の武器」にありました。肥前藩が所有していたアームストロング砲による砲撃の威力は当時としては凄まじいものがあり、戊辰戦争では上野の彰義隊(しょうぎたい)を一日で壊滅させ、また会津藩との戦いにおいては会津若松城(別名を鶴ヶ城)の落城に大きく貢献しました。

こうした功績が認められて、明治維新以後のいわゆる藩閥政府において、肥前藩は他の藩に並び称されるようになったのですが、これは最新鋭の武器をいち早く導入した、藩主である鍋島閑叟(なべしまかんそう)の指導力が功を奏したものでした。

閑叟はどうして最新鋭の武器の導入を急いだのでしょうか。その原因は、明治維新から約 60 年前

に肥前藩が受けた「屈辱」にありました。

1808年、長崎にオランダの国旗を掲げた船が入港しました。幕府や長崎の警備を担当していた肥前藩の関係者は、貿易相手のオランダ船と思い込んで入港を許可しましたが、実はイギリスのフェートン号が化けていたものでした。当時はイギリスとオランダとが戦争状態にあり、オランダの海外の拠点であった長崎の攻撃が目的だったのです。

フェートン号はオランダ商館を襲って食糧などを奪うなどの乱暴を働きましたが、最新鋭の設備を誇っていたフェートン号の前に、幕府も肥前藩も何ら抵抗することができず、当時の長崎奉行が責任を取って切腹するという悲劇をもたらしました。これをフェートン号事件といいます。

事件の後に幕府から叱責を受けた肥前藩は、汚名返上を目指して軍備を整えていきました。薩摩藩や長州藩よりもずっと前から攘夷の不可能を理解していた肥前藩だったからこそ、他の藩に先駆けて最新鋭の武器を開発し、やがては維新の元勳として君臨するという流れがつけられたのです。

ちなみに、フェートン号事件後の肥前藩では藩士の教育にも力を注ぎましたが、その余りにも厳しい内容に反発する藩士が現れ、自由な学問を求めた彼は、明治になってから自身で学校をつくりました。

その人物こそが大隈重信(おおくましげのぶ)であり、学校は現在の早稲田大学のことです。

#### 4. 幕府を崩壊させた「平和ボケ」の精神

さて、今まで述べてきた「薩長土肥」の台頭を許し、最後には政権を朝廷に返上するという大政奉還の道を歩まざるを得なかった江戸幕府でしたが、このような最期を迎えたそもそもの原因は、設立初期に行われた「制限貿易」にありました。

幕府が成立した17世紀前半の世界では、キリスト教のカトリックを信仰したヨーロッパ諸国による世界各地の植民地化が進んでおり、我が国も例外ではありませんでした。このため、幕府はカトリックを禁教にするとともに信仰する諸国との国交を断絶し、同じキリスト教でもプロテスタントであり、我が国での布教をしないと約束したオランダや、同じアジアの国同士である清国や李氏朝鮮など、限られた国との間でしか貿易を行いませんでした。

制限貿易にはこうした事情があったうえに、国交断絶という強硬な手段が可能だったのは、戦国時代からまだ時間が経っておらず、全国で数十万の武士と、それと数を同じくする鉄砲が健在という強大な武力があったからこそでした。

しかし、制限貿易を始めてから平和が長年続くうちに、我が国では武力よりも学問が重視されるとともに、制限貿易の意味が履き違えられて、諸外国との交渉を一切行わないという「鎖国」が当たり前と考えられるようになってしまいました。



我が国で平和が続いているうちに、世界の流れは大きく変わりました。蒸気機関を利用したいわゆる黒船が開発されたことで、それまで「海に囲まれて安全な国家」であった我が国が「海上のどこからでも狙われる危険な国家」へと大きく変化していたのです。

しかし、我が国を動かしていた幕府は平和をむさぼり続け、開国を勧告する勢力が国内外で現れてももみ消し、また学問が重視されたことでいつしか幕府自身の武力も著しく低下していました。このような外国にとっては絶好の、そして我が国にとっては最悪のタイミングでペリーが黒船を率いて浦賀にやって来たのです。

黒船の来航に幕府は大慌てとなり、今後の対策が練られましたが、長年の平和が続いたこともあって、幕府単独で外国との交渉をまとめる能力がすでに残っていませんでした。幕府はやむを得ず諸藩に対して広く意見を求めましたが、これは絶対にやってはいけないことでした。

なぜなら、諸藩の意見を重視するという行為は、幕府の政策に対して口出しすることを事実上認めることだからです。こうした悪しき前例を作ってしまったことや、その後の外国との交渉に関してすべてが後手に回り、結果として不平等条約を押し付けられてしまったこと、さらには諸外国との貿易に対して何の準備もしていなかったことで、庶民の暮らしが大きく混乱することなどが重なったことによって、年を追うごとに幕府の威信は低下していきました。

もともと、幕府自身も手をこまねいていたわけではありませんでした。1858年に大老に就任した井伊直弼は、それまでの幕府の失政のツケを一身に背負って、諸外国からの植民地化を回避するために日米修好通商条約を結びましたが、条約の締結に勅許(ちよっきよ、天皇による許可のこと)が得られなかったことが、国内の攘夷派を活気づけることになりました。

しかし、この当時清国に出兵したイギリスやフランスが、返す刀で我が国へ侵略する可能性も十分考えられたことから、両国の動きに先手を打つためには、たとえ不平等であってもアメリカと条約を急いで結ぶ必要があったのです。それなのに攘夷派は「諸外国など追い出せばよい」と口先では威勢のいいことを言いながら、もし我が国が侵略されたらどうするのかという深刻な問題に対しては、口をつぐんで答えようとしませんでした。

こうした攘夷派の動きを抑えるため、直弼は1858年から59年にかけて、攘夷派の大名や幕臣、あるいは公卿や諸藩の志士らを一斉に弾圧するという安政の大獄を行いました。直弼にとっては幕府の威信を守るための当然の行為だったのですが、吉田松陰や橋本左内(はしもとさない)といった有能な人間を問答無用で処刑してしまったのは、さすがにやり過ぎでした。

結果として多くの人間の恨みを買った直弼は、1860年旧暦3月3日、春にしては珍しい大雪の日江戸城へ向かう最中に襲われ、斬殺されました。この桜田門外の変によって幕府の権威はさらに低下してしまったのです。

直弼亡き後の幕府は、孝明(こうめい)天皇の妹の和宮(かずのみや)が将軍徳川家茂の妻となることに象徴される、いわゆる公武合体論を進めるとともに、新たに京都守護職として会津藩主の松平容保(ま

つだいらかたもりが選ばれました。

しかし、幕府の安泰を目指した公武合体は、将軍が天皇の義理の弟という立場になったことで、「弟たる幕府は兄の朝廷に従わなければならない」という図式が成立してしまい、逆効果となったほか、いわゆる政略結婚の形式と化したことで、攘夷派の反発をさらに買ってしまいました。

その後の幕府は、強硬な攘夷派であった長州藩を倒して一時は名誉を回復したものの、討幕の流れはどうすることもできず、ついに 1867 年に最後の将軍の徳川慶喜が大政奉還を行ったのですが、その後も先述したような流れを受けて、結局幕府は討幕軍と戦うことになりました。

鳥羽・伏見の戦いにおいて、幕府軍は討幕軍の最新鋭の武器に悩まされて苦戦しましたが、さらに「秘密兵器」の出現が、幕府の、というよりも慶喜の戦意を一気に喪失させる効果をもたらしました。

いわゆる「錦の御旗」のことです。朝廷の軍隊であることを示す錦の御旗を相手に戦う幕府軍は「朝敵」となることを意味しますから、その影響は確かに大きかったのですが、慶喜にとって自らが朝敵となることは、たとえ将軍という武家の棟梁(とうりょう)の地位を投げ出してでも、絶対に許されないことだったのです。

なぜ慶喜はそこまで弱気になってしまったのでしょうか。将軍になる前の慶喜は御三卿(ごさんきょう)の一橋家の当主でしたが、実は御三家(ごさんけ)の水戸藩から養子に入っていました。

水戸藩といえば先述した水戸学が発達しており、徳川家でありながら皇室を重視する学問を、慶喜自身も幼い頃から身に付けていました。つまり、慶喜は将軍家でありながら同時に皇室も尊敬しており、だからこそ自らが朝敵になることが認められなかったのです。

慶喜はそれまで立てこもっていた大坂城から密かに船で江戸へと向かうと、上野の寛永寺で自ら謹慎しました。その後、勝海舟と西郷隆盛との会見を経て慶喜は駿府(すんぷ、現在の静岡)へと移動し、徳川政権は名実ともに幕を下ろしたのです。

## 5. 時代に振り回された会津藩の悲劇

江戸城の無血開城によって大規模な戦乱は回避されましたが、戦わずして降伏することを嫌った旧幕臣を中心とする抗戦派は、各地で戦闘を続けました。

このうち、江戸の上野では彰義隊が結成され、寛永寺に立てこもって抵抗しました。このため、新政府軍は長州藩の大村益次郎(おおむらますじろう)が明治元(1868)年旧暦5月15日に総攻撃を加えました。これを上野戦争といいます。

戦争当時、彰義隊は約1,000人の兵力を持っており、簡単には決着しないと思われましたが、新政府軍が肥前藩の所有するアームストロング砲などの最新兵器を活用したことで、戦いは1日で終わ

り、彰義隊は壊滅しました。

鳥羽・伏見の戦いと同様に最新兵器の能力の高さを思い知らされる戦争となりましたが、敗れた彰義隊の残存兵力は東北地方などへ落ちのび、戦いはさらに続くことになりました。

上野戦争の勝利によって江戸を支配下に置いた新政府軍は、戦いの矛先を、奥羽越列藩同盟(おうえつれっばんどうめい)を結成していた東北諸藩に向けましたが、特に会津藩に対しては執拗(しつよう)に攻めました。

なぜなら、会津藩主の松平容保が、京都守護職として討幕派と何度も衝突していたからです。なかでも長州藩は、会津藩が預かっていた新選組による池田屋事件などで多くの藩士を殺されていたから、その恨みは深いものがありました。

会津藩は会津若松城に籠城して抵抗を続けましたが、先述したように肥前藩の阿姆斯特朗砲による激しい砲撃もあり、明治元年旧暦 9 月 22 日に降伏しました。この戦いを会津戦争といえます。

会津戦争には、平均年齢が 16～17 歳の男子で編成され、壮絶な自刃を遂げた白虎隊(びゃっこたい)などの悲劇のエピソードが多く残されていますが、かつては孝明天皇から朝廷への忠節に対するお褒めのお言葉を賜った会津藩が、時代が変わったとはいえ、戊辰戦争において新政府軍に「錦の御旗」を向けられ、朝敵として戦わなければならなかったとは、何という運命の巡り合わせでしょうか。

なお、会津戦争を経て旧幕府軍の残存兵力は、仙台から蝦夷地(えぞち、現在の北海道)の箱館(はこだて、現在の函館)へと移動してなお戦いを続けたものの、翌明治 2 (1869) 年には降伏し、鳥羽・伏見の戦いから約 1 年半にわたって続けられた戊辰戦争は、新政府による国内統一というかたちで終止符を打ちました。

ところで、幕末から戊辰戦争の終結までに多くの尊い生命が犠牲となったことに心を痛められた明治天皇は、その御霊(みたま)を慰めるため、明治 2 年 6 月に東京招魂社(とうきょうしゅうこんしゃ)を創建されました。東京招魂社はその後明治 12 (1879) 年に靖国神社(やすくにじんじゃ)と改称され、国難に際して祖国に殉じた尊い英霊(えいれい)をお祀(まつ)りする神社として現在に至っています。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 12 近世暁光編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>

「逆説の日本史 13 近世展開編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379683>

「英傑の日本史 新撰組・幕末編」(著者：井沢元彦 出版：角川文庫)  
YouTube 再生リスト「幕末百景」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4FgxNHwZJjwEi-sScqvFge>  
黒田裕樹の歴史講座 <http://rocky96.blog10.fc2.com/>